CASE
03

玉城の土の匂いと年長者への感謝を形にしたい

玉城字語辞典編さん委員会



あーぬやーから　さし　ちこうてぃ　みじ　はこどぅたん（昔は井戸のない家はある家から長さ五尺ほどの天秤棒を使って水を運んでいた）」など、うやほ（先人）の暮らしが目に浮かぶような例文を心がけています。

辞典の掲載候補に挙げた言葉は二千以上。それを国立国語研究所の山田真寛准教授の助言から、字の約200世帯に配布したところ、住民たちのしまむにへの想いに火が付きました。「この言葉も追加してほしい」「この言葉なら違うアクセントでこんな意味になる」などの声が続々と集まって、12名から、一挙に字民総出の辞典づくりへと広がりました。

50代から90代まで多様な立場と視点が集う

参加者は、パソコンで例文を記録する50代の若手から、むぬしり（物知り）の90代の年長者までさまざま。立場もほとんど玉城育ちの人もいれば、Uターンもおり、親が同字出身の玉城二世も。それぞれの特技と視点を活かして、辞典の完成を目指します。

そこにいつもあるものが、手作りの郷土菓子。参加者の一人が持ってきてくれるそうで、続けられる秘訣の一つだそうです。辞典が目標ですが、毎週集って和気あいあいと賑わうこの状況そのものもまたかけがえのないもの。しまむにがくれた贈り物と言えるでしょう。

しまむにには島の風景を描写する力がある

最年少の西田真弓さんは、父親が玉城出身の二世。しまむにに興味を抱く中で、「いつか、自分のようにしまむにに興味を持った人が知ることができるように」と辞典づくりに参加。パソコンを扱う貴重なメンバーとして、言葉の記録係という大役を担います。

「皆さんと毎週会っているうちにだいぶ分かるようになりました。しまむにには、両親が幼い頃の沖永良部島の風景を描写してくれる力があります」と西田さんは話します。

「玉城語の例文が載った辞典が、字誌に加わることで、先祖の歴史が深く分かるものになるのでは」と、完成に期待を寄せる前さん。しまむにには、写真や映像とはまた違った、先祖の暮らし――「土の匂い」を未来に遺せる媒体と言えるのかもしれません。



辞典に乗せる例文を検討する様子



玉城字語辞典編さん委員会の皆さん

玉城字語辞典編さん委員会

玉城字のしまむに「玉城語」の辞典づくりのため集まった、同字出身の50～90代の12名。メンバーは、学校関係者、福祉関係者、島二世、長寿クラブ役員、民謡継承者など。毎週日曜の14時に玉城字公民館で編さんに励む。



CASE
04

母語は、共通語よりもしまむに。下平川のみんなのお母さん

沖 良子さん

しまむにで話すと、ぴたっと気持ちがはまる

沖良子さんは11人家族の長女として生まれ、島を出るまでは三世代の賑やかな家庭の中で過ごしました。学校教育の中で方言が禁止された時代においても、しまむには家族の共通語で、親しんだ言語でした。

高校卒業後、名古屋と兵庫で暮らし、奈良での結婚後、1981年に島に帰った沖さん。自身が母になってからも、夫婦と親子の会話はしまむにでした。今でも子どもたちはしまむにを聞いて理解することができると話します。沖さんにとって、しまむにの方が共通語よりも母語に近い。「しまむにで話すと、ぴたっと気持ちがはまって、すっと通じるんですよね」と、その肌への馴染みっぷりを話します。

しまむに話者として声優デビュー！

下平川小学校で子どもたちにしまむにを教える沖さんですが、実際の音声をＹｏｕＴｕｂｅで聞くことができます。すると、ユーモラスな顔をした白くまが主役の、浦島太郎や桃太郎をを下敷きにした短編アニメが出てきます。これは鹿児島では「白くま」アイスでお馴染みのセイカ食品の動画。このナレーションに声を当てているのが、ほかでもない沖さんなのです。

島の観光協会のフリーペーパーに以前、しまむに話者として沖さんのことが載り、それがセイカ食品のプロモーション関係者の目に止まったことで依頼を受けたとのこと。動画では沖永良部島以外にも、種子島や奄美大島の方言による動画が並んでいます。

驚きながらも、滅多にないことだからと引き受けることにした沖さん。「浦島太郎の話だから」と、いつでも情景を思い浮かべて話せるようになるために、浜辺に立って海を見ながら何度も何度も練習してから、鹿児島市にわたって収録に臨みました。

しまむに継承はあと5～6年が勝負

沖さんは、しまむには「伝えるための言葉」であり、「つながるための言葉」でもあると話します。たとえば、近所に住む高校生の玄太さんとは、彼が小学生の頃から知っているという長い付き合い。玄太さんがイベントでしまむにで発表をするときは、沖さんはしまむにの先生となり、フレーズやイントネーションなど、生きた言葉を教えます。

一方で、「継承はあと5～6年が勝負」だと危機感を募らせる沖さん。「国頭に住むおばあさんが、『しまむにがなくなったら島がなくなるのと一緒だ』って話していました。私たちが元気なうちに、録音したり動画に残したりしておきたいです」と話します。

生きたしまむにを聞いて、教わり、話せる時間はいつまでも続く訳ではありません。沖さんは、島内でも島外でも、リアルでもオンラインでも、しまむにをつなぐことに余念がありません。



下平川小学校で子どもたちがしまむにの歌を歌う様子

方言すぎる昔話
「桃太郎」
沖永良部島篇

方言すぎる昔話
「浦島太郎」
沖永良部島篇

沖 良子
おきりょうこ

1952年生まれ、後蘭字出身。島出身の夫との結婚の後、1981年に帰島し、現在は下平川（ゆしきゃ）字在住。国立国語研究所のしまむに学習プログラムでは、マスターの一人として、若い世代にしまむにを教えて継承に取り組む。